

成沢家 父方の記録

北方の譜

ほっぼうのふ

出羽の城から、雪の苗穂へ。

成沢城の侍から、成澤義雄まで | 2026年7月 編纂（取材継続中）

表紙写真：成沢城跡（山形市）／出典：My favorite things about Yamagata

一枚の家系図から

PROLOGUE

出羽の国に、成沢城という城があった。

——そこを守った侍・成沢道忠が、この家の先祖だと伝わる。

父・義雄は言う。「先祖を辿ると、**成沢道忠**という田舎侍に行き着く」「先祖は百姓兼田舎侍だ」と。山形県鶴岡市大山のあたりが、その土地だという。名字の「成沢」は、地名から起こった——大雨のとき沢が轟音を立てて「鳴る」ことから「鳴沢」、のちに「成沢」。その名を負う城が、出羽の山あいを実在した。

成沢城は、出羽の大名・最上氏の一族が築いた山城である。最上家の祖・斯波兼頼の孫**兼義**が一三八三年に築き、地名を取って「成沢」を名のった。以来およそ二百四十年、最上領の南を守る最前線の城でありつづけた。その系譜の末に立つのが、伝説の武将・**成沢道忠**——この城とともに語り継がれた、この家の先祖である。

その侍の家が、なぜ庄内・鶴岡の在に移り、百姓を兼ねる田舎侍となり、やがて海を越えて北海道・苗穂へ渡ったのか。そして八人きょうだいの七男が、なぜ英語学者になったのか。二〇二六年七月に届いた一枚の家系図（幕末の**成澤勘左エ門**に始まり、父・義雄の世代までを記す）を手がかりに、その長い道のりをたどるのが本書である。

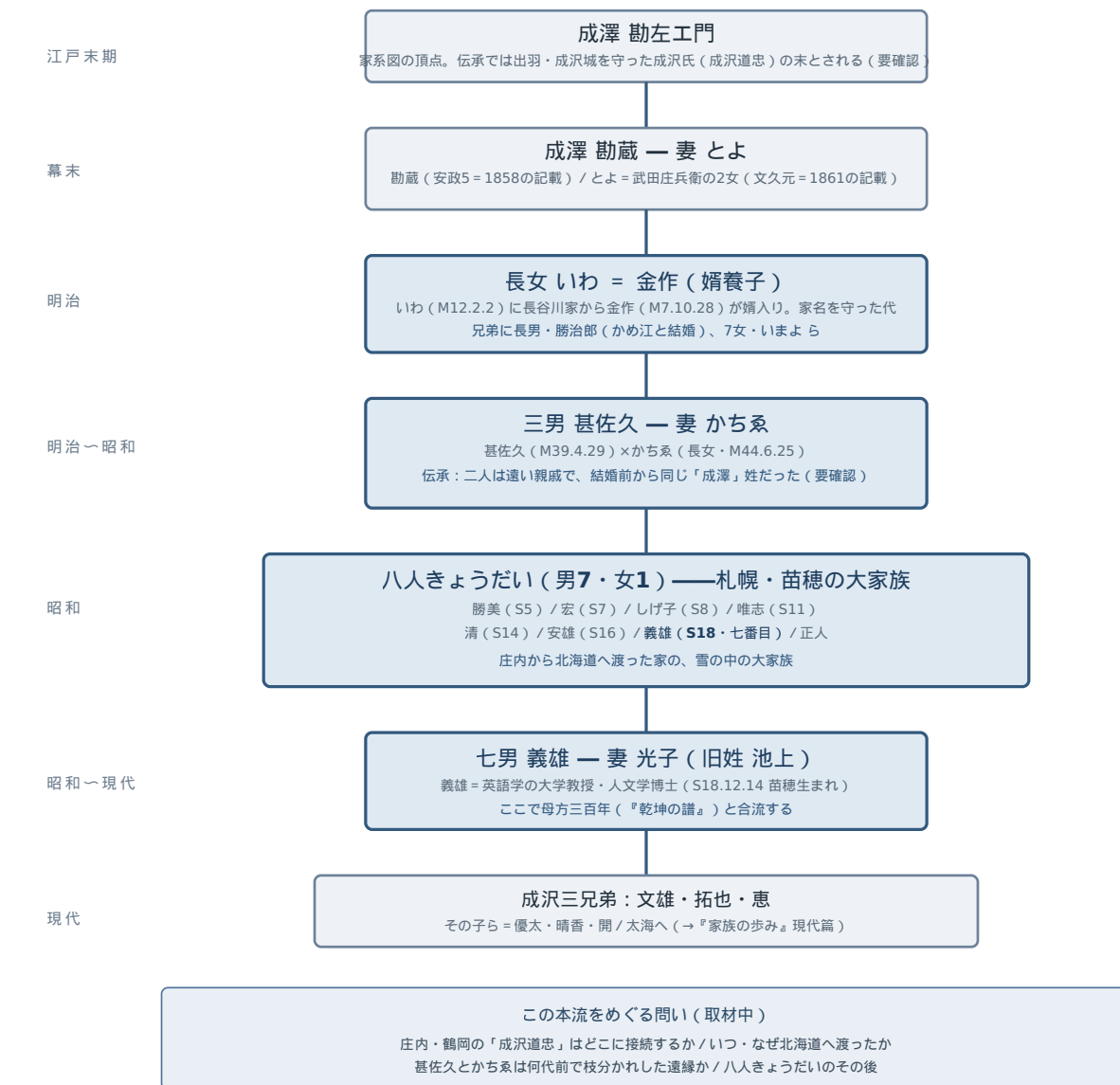
見取り図	父方の本流 —— 幕末から義雄まで
第一部 源流	庄内・鶴岡の伝承／幕末の成澤家／婿養子の家
第二部 苗穂	甚佐久とかちゑ／八人きょうだい
第三部 義雄	雪の街に生まれて／英語の道／海を渡った教育者
資料編	家系図（原本写真・書き起こし）／年表／結び・要確認事項

資料の取り扱いについて。本書の核は家蔵の家系図一枚（2026年7月受領）と、義雄本人・家族の証言である。写真からの判読には誤りがありうるため、断定できない事項は「要確認」と明記し、推測による脚色は加えていない。取材の進展にあわせて更新する。

父方の本流 —— 幕末から義雄まで

THE MAIN LINE

家系図（家蔵）にもとづく。藍色＝本流。日付は判読値（要確認）。



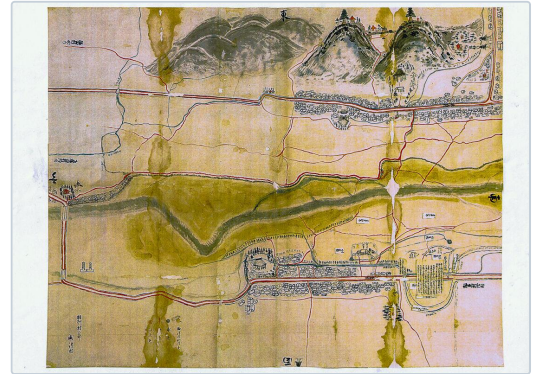
出羽の山城 ― 成沢城と成沢氏

NARISAWA CASTLE

この家の名字の源には、ひとつの城がある。出羽国・いまの山形市の南、蔵王のふもとに築かれた山城――**成沢城**である。

南北朝の一三八三年（永徳三年）、出羽の大名・最上家の祖である斯波兼頼の孫**兼義**が、須川のほとりに城を築き、やがて「成沢」の地へ移した。兼義はその地名を名字とし、**成沢氏**を称する。以来この城は、長谷堂城と並んで**最上領の南を守る最前線**として、およそ**二百四十年**ものあいだ在りつづけた。標高二〇〇メートル、比高六〇メートルの、山を利用した堅い城だった。

「成沢」という地名そのものが、この土地の険しさを語っている。もとの字は「**鳴沢**」――大雨のとき、沢の水が一気にあふれ、轟音を立てて「**鳴る**」ことから来た名だという。荒ぶる水の音を名に持つ沢の城。それが、成沢という名字のふるさとである。



成沢城の絵図。山あいには曲輪と堀をめぐらせた山城の姿が描かれている。（出典：My favorite things about Yamagata）



上空から見た現在の城跡。本丸広場・二ノ丸跡・外堀、そして城名の由来「鳴沢川」の位置がわかる。（出典：同）



本丸跡。土塁と曲輪の地形が、いまでも山上に残る。（出典：同）

伝説の武将 ―― 成沢道忠

成沢氏の系譜は、兼義から義総・義佑・義清と続き、その末に**成沢道忠**が現れる。この道忠こそ、家に伝わる先祖である。伝承の道忠は豪傑である。一五七〇年代、上山勢と伊達勢が最上義光に対峙した**柏木山合戦**では、齢七十にして成沢城を守り、一五八五年の**安保攻め**では五千騎を率いて敵城へ攻め寄せたという。義光の死後は跡目争いに敗れ、陸奥へ落ちのびた。（もっとも、これらの武勇伝は年代が合わず、成沢氏の親子二～三代の事績を道忠一人にまとめた「伝説」だろうと研究者は見る。それほどに、語り継がれた名だったということでもある。）

そして一六二二年（元和八年）、**最上家が改易**となり、成沢城は廃城となった。二百四十年の城の歴史が閉じ、成沢の侍たちは、仕える主を失って各地へ散っていく。

要確認：この成沢氏（山形・最上）と、のちの鶴岡・大山の成沢家との直接のつながり（下記・第一部(2)）。

城を失って ― 鶴岡・大山の田舎侍

FROM CASTLE TO COUNTRYSIDE

最上改易と、庄内への道

一六二二年の最上改易ののち、旧領は分割され、庄内には酒井氏が入って庄内藩が置かれた。禄を失った最上の侍たちの多くは、刀を鋤に持ちかえ、土地に根を下ろして生きる道を選んだ。家に伝わる「先祖は百姓兼田舎侍」「鶴岡市大山のあたり」という言葉は、まさにこの姿と重なる――かつて成沢城を守った侍の一族が、庄内の在郷に移り、田を耕しながら帯刀の家格を保った、という筋である。大山は酒造で栄えた町で、かつて大山藩も置かれた地。城を失った侍が身を寄せるにふさわしい、豊かな在郷であった。

※戦国の道忠（十六～十七世紀）と、下の家系図の頂点・勘左エ門（幕末＝十九世紀前半）の間には、およそ二百年の空白がある。「先祖は成沢道忠」は、世代を大きく飛び越えた遠い言い伝えとして受けとめたい。両者を結ぶ確かな記録は、これからの取材の宿題である。

幕末の成澤家 ― 勘左エ門から勘蔵へ

家系図の頂点には成澤勘左エ門、続いて成澤勘蔵の名がある。勘蔵には「安政五年」（一八五八年）、妻・とよには「文久元年」（一八六一年）の記載――ペリー来航から数年、幕末の動乱を生きた夫婦である。とよは武田庄兵衛の二女。とよが昭和二十一年（一九四六年）まで生きたという記載が正しければ、幕末生まれの人が、終戦の翌年まで一族を見守っていたことになる。長女・いわには金作が婿養子に入り（金作は長谷川竜五郎の家の出とみられる）、娘に婿を取って家名をつないだ。その子の代に、次章の甚佐久が生まれる。

要確認：「安政5.3.25」「文久元年9.15」等の日付が生年か没年か。勘左エ門より前（成沢城の侍まで）の代。金作＝長谷川竜五郎の子の確定。鶴岡→北海道への移住が誰の代・いつか。家紋（最上・成沢氏との一致は接続の傍証になる）。

雪の大家族 ―― 甚佐久とかちゑ

THE FAMILY IN NAEBO

遠い親戚どうしの結婚

いわと金作の三男・**甚佐久**（明治三十九年＝一九〇六年生まれの記載）は、**かちゑ**（明治四十四年＝一九一一年生まれの記載）と結ばれた。家族の伝承によれば、二人は**遠い親戚で、結婚前から同じ「成澤」の苗字だった**という。家名や土地を守るために同族の遠縁と縁組みする――旧家には珍しくない、家の存続を賭けた結婚のかたちである。二人がどの代で枝分かれした縁者なのかは、これからの取材で確かめたい。

八人きょうだい ―― 男七人、女一人

甚佐久とかちゑは、札幌・**苗穂**の地で八人の子を育てた。男七人、女はしげ子ただ一人。昭和五年の長男から敗戦をはさんで、雪の街で次々と生まれた大家族である。（家では長く「農家の家」と語り継がれてきたが、義雄によれば**苗穂の家は農家ではなかった**。甚佐久が何を生業としていたかは、これからの取材で確かめたい。）

1 勝美	昭和5年（1930）2月3日の記載
2 宏	昭和7年（1932）1月3日の記載
3 しげ子	昭和8年（1933）11月9日の記載。 唯一の女子
4 唯志	昭和11年（1936）10月19日の記載
5 清	昭和14年（1939）2月26日の記載
6 安雄	昭和16年（1941）7月25日の記載
7 義雄（父）	昭和18年（1943）12月14日（本人確認済み）
8 正人	生年月日は判読不確か（9月13日の記載）。末子

※名前・日付は家系図（写真）からの判読。正人の生年など不鮮明な箇所は要確認。きょうだいの現況（存命・居住地）・それぞれの人生は、今後の取材課題。

家系図が正した一つの事実。父・義雄の生年は、長く家の記憶で「昭和十四年」とされてきた。だが家系図は「昭和十八年」と記し、きょうだいの生年の並び（清＝昭和14→安雄＝昭和16→義雄）とも合う。本人に確かめると――**昭和十八年（一九四三年）十二月十四日が正しかった**。一枚の紙が、七十年来の思い込みを正した。

苗穂の家 ―― 杏の木のある家

この苗穂の家を、孫の拓也は夏の帰省で覚えている。庭には**杏（あんず）の木**があり、実を採った記憶がある。隣には長男・**勝美**の一家が住んでいた。勝美は無類の車好きで、とりわけ日産を好んだ――のちに弟・義雄が日産の車を乗り継ぐのは、この兄の影響だという。勝美の子とみられる「ノブちゃん」はバイクを愛し、のちに仙台へ移って、義雄・光子とも交流を続けた。（苗穂の家の生業や暮らしの細部、勝美一家の人びとの名や現況は、これからの取材で確かめたい。）

雪の街に生まれて —— 七男・義雄

YOSHIO, THE SEVENTH SON

昭和十八年（一九四三年）十二月十四日、義雄は札幌・苗穂に生まれた。戦争のさなか、八人きょうだいの七番目。誕生日は**赤穂浪士討ち入りの日**——その所以で、赤穂義士の「義」を採って「義雄」と名づけられた。庄内の田舎侍の血筋に、忠義の日の名前である。

終戦のとき、義雄はまだ幼かった。進駐軍の兵士にもらった**一本のコーラ**が、アメリカへの憧れの原点だった——と家族は伝える。八人きょうだいの七男は学問の道を選び、**岩見沢教育大学**から**北海道大学大学院**へ。英語学を修め、**宮城教育大学**の助教授として仙台へ赴任する（次男・拓也が生まれる直前のことだ）。のちに**東北学院大学**の教授へ。妻・光子との結婚のとき、光子の父・池上茂雄（理学博士）は「成績が一番と二番の天才同士が結婚した」と喜んだという。結婚した当初、義雄はまだ大学院生で定まった収入がなく、ひと足先に高校教師となっていた光子が家計を支えた。

雪と、自転車と、車と —— 若き日の義雄

雪の街に育った義雄は、**スキーもスケートも得意**だった。晩年、息子に「どちらが得意だったか」と問われると、少し考えて「スキー」と答えている。その腕前は仙台へ移ってからも衰えず、**宮城県のスケート大会（成人の部）に出場して上位に入った**ほどである。ふだん子育てに関わらない義雄が、冬のあいだだけは息子たちをスキー場やスケート場へ連れ出した——その顛末は、現代篇『家族の歩み』に詳しい。

学者になる前の義雄は、存外に活動的だった。大学時代は**サイクリング部**に入り、自転車で北海道の各地を巡ったという。仙台へ移ってからも、中山の公務員宿舎の物置には、サドルのない古いロードバイクが眠っていた——「サドルは盗まれた」と本人は言っていた。

車も好きだった。**ダイハツ・フェローマックス**に始まり、日産の**サニー・スタンザ・セドリック**、そしてトヨタ・**カムリ**と乗り継ぐ。日産づいてるのは、車好きの兄・勝美の影響である。英語学者として車名の「サニー」を「英語としてはおかしい」と評しながら、そのサニーに乗っていたのは、いかにも義雄らしい。雨の日、そのサニーで三台がからむ事故に遭ったこともある（対向車線からはみ出してきた改造車が原因だった）。大きな怪我はなかったが、以後、足の付け根に痺れが出るがあったという。

のちに息子・拓也は、三十代の終わりから四十代にかけて（二〇一一～一七年ごろ）、ロードバイクに深くのめり込む——六台を乗り継ぎ、遠征費も含めれば五百万円を超えるほどに。その遠い伏線は、案外、この物置に眠っていた一台にあったのかもしれない。

海を渡った教育者



米デラウェア州ドーバーの地方紙『Delaware State News』（1995年春）の義雄。「日本の学生の成功を支えているのは、学生がよく勉強するという事実だ」——フルブライト研究者・ウェスレー大学客員研究員 Yoshio Narisawa として、日米の教育を語る。（家蔵）

海外出張の多い研究者だった。オーストラリアには幾度も渡り、長いときは一年（若い拓也たち家族を一ヶ月呼び寄せた）。イギリス赴任には光子も同行した。そして一九九五年、フルブライト研究者（Fulbright Scholar）として米国デラウェア州のウェスレー大学に客員研究員として迎えられ、五月まで日本の歴史・文化・教育を講じた。現地の二紙が義雄を大きく取り上げ、日米の教育を語るインタビューを載せた——「われわれの制度は硬直的で、あなたがたの制度は柔軟だ」。コーラー本から始まったアメリカへの憧れは、教壇の上で果たされた。のちに人文学博士（Doctor of Humanities）——ウェスレー大学からの名誉学位である。



『The Dover Post』1995年4月12日（水）の特集——見出しは「His first taste of America was a sip of Coke（初めて味わったアメリカは、一口のコラーだった）／45 years later, he's still drinking in American culture（45年後もなお、アメリカ文化を味わい続けている）」。終戦直後に進駐軍の兵士がくれた一本のコラーが、義雄のアメリカへの憧れの原点だったという逸話を、当時51歳の本人が語っている。（家蔵）



東北学院大学の学長応接室で開かれた昼食会。ウェスレー大学から義雄に**人文学名誉博士号 (honorary Doctor of Humanities)** が贈られた。前列左からミラー博士、成沢博士、クアマツ博士。(家蔵／米紙掲載)

家庭での義雄——「宇宙人みたいな父」、枕元の自作物語に毎回登場するアントニオ猪木、オーストラリア土産のプーメラン、運動靴に大書された「なりさわ」——は、現代篇『家族の歩み』に詳しい。

この一枚が正した事実。米紙の掲載年は長く「1990年」と伝えられてきたが、実物の見出しは「**Wednesday, April 12, 1995**」。4月12日が水曜だったのは1995年である。年を1995年に正すと、記事中の「51歳」も昭和18年（1943）12月生まれと一致し、生年の裏づけともなった。

要確認：フルブライトの研究テーマ。『Delaware State News』掲載記事の正確な掲載日（切り抜きに写らず）。記念写真の同席者の和名（クアマツ博士／ウェスレー大学美術教授 Lon Fluman ほか）。岩見沢教育大学の正式名称（当時の北海道学芸大学岩見沢分校か）＝義父・池上茂雄が教鞭をとった校と同じであれば、義雄と光子の縁の起点にもかかわる。

家系図 ―― 書き起こし

THE FAMILY TREE

成澤家（父方）家系図（家蔵・2026年7月受領）を書き起こした要旨。左端の成澤勘左エ門から、右列の八人きょうだい（義雄の世代）まで、五代が一枚に収められている。※家系図の原本写真は家蔵資料（オリジナルデータ）として別途保管し、本書には掲載しない。

第一世代	成澤 勘左エ門
第二世代	成澤 勘蔵 ― とよ（武田庄兵衛の2女。没 S21.2.14の記載）
第三世代	長男 勝治郎（M19）＝かめ江（M25・斎藤清太郎の長女）／長女 いわ（M12）＝金作（M7・婿養子、長谷川竜五郎の家から）／7女 いまよ ほか
第四世代	てつゑ（長女）／誠太郎（長男・M31）＝やよゑ → 松太郎・政雄・光子・國雄・秋子・花子・康雄ら／甚佐久（3男・M39）＝かちゑ（長女・M44）／4男（M42）／立身（5男・T4）／すゑの（3女・T8）ほか
第五世代	甚佐久×かちゑの8人：勝美・宏・しげ子・唯志・清・安雄・義雄・正人

※詳細な書き起こしと判読メモは素材DB「ルーツ」成沢家父方家系図」に収録。第四世代の「光子」は父方の別人であり、母・成沢光子（旧姓池上）とは無関係（混同注意）。中段の一群（いちせ・さだ子・春雄・勝雄・木子・きく子・利夫）の親は未確定。

年表 —— 家と時代

CHRONOLOGY

1383（永徳3）	最上直家の孫・兼義が 成沢城 を築城、地名を取り 成沢 を称す（成沢氏の起こり）
1578（天正6）	柏木山合戦。成沢城が最上義光方の前線基地に。成沢氏は最上領南の守り
～1600頃	伝説の武将 成沢道忠 が成沢城を守ると伝わる
1622（元和8）	最上家改易、成沢城廃城 。庄内に酒井氏。成沢の侍は各地へ散る（→鶴岡・大山への道か）
安政5（1858）	成澤勘蔵にかかる年記載（生年か。日米修好通商条約の年）
文久元（1861）	とよ（武田庄兵衛2女）にかかる年記載
明治7（1874）	金作（のち婿養子）生まれの記載
明治12（1879）	いわ（勘蔵の長女）生まれの記載
明治39（1906）	甚佐久（いわ・金作の3男）生まれの記載
明治44（1911）	かちゑ生まれの記載
昭和5～（1930～）	札幌・苗穂で8人きょうだいが次々誕生（勝美～正人）
昭和18（1943）	12月14日、義雄誕生 （8人の7番目。赤穂義士討ち入りの日）
昭和21（1946）	とよ 没の記載（幕末生まれの祖母、終戦の翌年まで）
終戦直後	幼い義雄、進駐軍兵士にコーラをもらう——アメリカへの憧れの原点（家族の伝え）
昭和40年代	義雄、岩見沢教育大→北大院→宮城教育大助教授（仙台へ）。1969年、光子と結婚
1995（平成7）	フルブライト研究者として渡米。ウェスレー大学客員研究員（～5月）・現地二紙に掲載。ウェスレー大学より人文学名誉博士号
2026（令和8）	家系図を受領・精読。本書『北方の譜』を起稿（取材継続中）

※年表の幕末～明治の項は家系図の判読値。生年か没年かを含め、戸籍・除籍謄本での裏づけが今後の課題。

北の血、南の血

EPILOGUE

庄内の田舎侍から、雪の苗穂の大家族へ。八人きょうだいの七男は英語学者となり、海を渡り、そして池上光子と出会った。母方三百年の譜（『乾坤の譜』）と、この北方の譜は、義雄と光子のもとで一つになる。その先は、現代篇『家族の歩み』が受け継いでいる。

この巻はまだ薄い。だがそれは、物語が乏しいからではなく、取材がこれからだからである。八人きょうだいの一人ひとりに人生があり、苗穂の家に四季があり、庄内から北海道へ渡った日の決断があったはずだ。次の頁は、これからの取材を書く。

成澤勘左エ門 → 勘蔵 — とよ → いわ = 金作（婿養子） → 三男 甚佐久 — かつゑ（遠縁・同姓の伝承） → 七男 義雄 = 池上 光子 → 文雄・拓也・恵 → 優太・晴香・開／太海

確定済み：①義雄の生年＝昭和18年（1943）12月14日（2026-07-23本人確認。家の旧記憶「昭和14年」を訂正）。②義雄は8人きょうだい（男7女1）の7番目。③両親＝成澤甚佐久×かつゑ。④家系図は幕末（勘左エ門・勘蔵）まで遡る。

要確認事項（今後の取材課題）

初回の本人取材を二〇二六年七月二十五日に予定。祖父母（甚佐久・かつゑ）の生業と人柄、八人きょうだいのその後、鶴岡から北海道への移住の経緯を中心に、義雄本人から聞き取る。あわせて父方家系図の現物・古い写真・アルバムの回収をめざす。

1. 成沢道忠（田舎侍・鶴岡市大山）と勘左エ門の接続。この家系図は鶴岡時代のものか、北海道移住後の家のものか。
2. 鶴岡 → 札幌・苗穂への移住は誰の代か、いつか、なぜか（北海道開拓・屯田兵・仕事のいずれか）。
3. 甚佐久とかつゑの「遠縁・結婚前から同姓」の伝承の裏づけ。かつゑの実家はどの成澤の枝か。
4. 八人きょうだいの現況（存命・居住地・職業）と、連絡の取れるいところ。
5. 家系図の各日付が生年か没年か（安政5・文久元ほか）。正人の生年。4男の名。
6. 苗穂の家の場所・生業（農家ではない＝甚佐久は何をしていたか）・暮らし。義雄の両親（甚佐久・かつゑ）の人柄と最期。杏の木のある家。
7. 隣に住んだ長男・勝美一家（車好き・日産びいき）。子「ノブちゃん」（バイク好き・のち仙台で義雄夫妻と交流）ほか勝美の子らの名・現況。
8. 『Delaware State News』の正確な掲載日、フルブライトの研究テーマ。岩見沢教育大学の正式名称（義父・茂雄の勤務校と同じなら、義雄と光子の縁の起点にかかわる）。
9. 家紋・菩提寺・過去帳・墓の所在（鶴岡か札幌か）。

出典

SOURCES

- ・家蔵一次資料：成澤家家系図（2026年7月22日受領・写真）／米デラウェア州紙掲載記事（成沢義雄・1995年）＝『Delaware State News』（教育比較）・『The Dover Post』1995年4月12日（コーラ特集）・人文学名誉博士号授与写真の計3点／全訳＝素材DB「一次資料_成沢義雄_米国新聞記事1995_翻訳」
- ・成沢城の写真・絵図（表紙・第一部）：My favorite things about Yamagata（山形の城跡紹介サイト／my-favorite-things-about-yamagata.com）ほかより。私的記録として出典明示のうえ掲載。
- ・成沢城・成沢氏・成沢道忠の史実：Wikipedia「成沢道忠」「最上氏」、山形市「成沢城跡」、攻城団、城郭放浪記ほか（2026年7月調査）。詳細は素材DB「ルーツ_成沢道忠_調査」。
- ・証言：成沢義雄（生年確認 2026-07-23／誕生日と命名の由来 2026-07-22）／成沢拓也（遠縁・同姓の伝承、住まいの遍歴 2026-07-23）
- ・関連資料：素材DB「ルーツ_成沢家父方家系図」（判読メモ）／「父_成沢義雄」（人物カード）／取材質問シート（92_取材質問_父母面談）

※本書は成沢家の私的な記録として編纂したものです。「要確認」の事項は取材の進展にあわせて更新してください。姉妹編＝『乾坤の譜』（母方）・『家族の歩み』（現代篇）。